

夏季外国語セミナー2004

9月14日から17日までの3泊4日、慶應義塾立科山荘で第33回夏季外国語セミナーが開催された。本年度は5言語（英・独・仏・中・西）9コースが成立、参加者数は昨年の1.5倍に当たる75名、ご協力いただいた講師は18名にのぼった。資格試験対策や日頃の勉強の補習など、参加する学生の目的はさまざまだが、語学力をアップしたいという同じ意志をもつ仲間と共に、蓼科高原の自然に包まれて過ごす4日間は短くとも充実した時間となったようである。



苦手意識の克服から

基礎からの英語コース担当 前田 華奈（中等部教諭）

新設の「基礎からの英語コース」を迫村センター所長と共に担当させて頂きました。

「受験してきた人に比べて語彙が圧倒的に足りない。それがコンプレックス。」一貫教育校出身の受講者は口をそろえて言いました。「英語がダメでも、全教科の平均で大学には推薦されるでしょう？ 覚えても定期テストが終わるとパーッと忘れちゃう。受験がないから繰り返し覚えて定着を図る必要がなかった」と。中等部教諭の私には耳の痛い言葉でした。中等部でもよく話題に上りますが、受験のようなある種の強制力が無い状態で如何に自主的に勉強させるか。やはり何らかの強制力は必要なのか。センターのプロジェクトの「標準テスト開発」との絡みでも、もっといろいろと考えることがありそうです。

「受験で丸暗記した語彙は、読解には役立っていますが、いざ使うとなると...。」一方、受験を経てきた学生には、正しく発音できないような、うる覚えの語彙を多用してしまう傾向がありました。だから、ミスも多く自信を持って発話できない。

いずれにせよ、両者に共通するのは「苦手意識」。そこで、一切辞書を使わずなるべく簡単な語彙を使う訓練をしました。難しい語彙を増やすより、既習の単語や熟語でいろいろ表現できることに気づいてもらうのが先決でした。苦手と思っている以上、勉強は楽しくはならないものです。たった4日間で教えられることは高が知れています。ならば、自分の英語力でもけっこういける、と、「その気」になってもらおう。そうすれば、モチベーションも上がり今後の学習にも繋がるはず...。「勉強のコツが少し分かった気がします。もっと頑張らなきゃ。」最終日の彼らの言葉です。立科で飛び交っていた6ヶ国語。授業外でも積極的に質問し会話を楽しんでいた受講生たち。あの意欲があれば大丈夫。参加者ひとりひとりが、今頃、更なる熱意を持って言語習得に取り組んでいることを願ってやみません。

CONTENTS

| | |
|---|---|
| 夏季外国語セミナー2004 | 1 |
| センター設置科目講師紹介 | 3 |
| 研究プロジェクト活動報告 | 5 |
| パネルディスカッション 「デジタル・コンテンツとE-learning」 | 6 |
| 慶應義塾普通部の英語教育 跡部 智 | 6 |
| Announcements | 7 |
| オープンキャンパス報告 10月からの新設講座・科目紹介 オーストラリア短期語学研修 追悼 新副所長紹介 | 8 |
| 編集後記 | 8 |

特別な日々

フランス語コース担当 笠井 裕之（法学部助教授）

はじめる前は、どちらかといえば気が重かった。講師探しは難航したし、学生もなかなか集らず、そもそもコースの成立からして危うかった。それに夏季休暇中の4日間をまるまる拘束されるのはかなわないな、とも思った。ところが、こうしたことを書きつけるのに少しばかり記憶の糸をたぐらなければならないほど、今はむしろすがすがしい思いである特別な日々のことを考えている。そう、「特別な」日々。特別だったから、何もかもが変わった。

空の青が特別。樹木の薫りが特別。学生たちや各語学科の同僚教員、職員のみなさんとの共同生活が特別。でも、なかでも一番だったのは、フランス語コース5名の参加学生がときおり見せてくれた、学ぶよるこびに触れたときの真摯な笑顔だった。教えるという職業というか機会をもつわたしたちにとって、これは得がたい僥倖である。いつもは気づかずにいることが多いはずのこんな瞬間瞬間に、いつもとちがう意識を向けることができたということ、ひょっとしたらこれこそがほんとうに「特別な」ことだったのかもしれない。

教材は外国語学校でも用いている『Taxi!』第1巻。セミナー終了後も秋の外国語学校・日吉特別講座で続きを学べる、というのが当初の目論見だった。そのためには一冊の3分の1をこなさなければならないが、学生たちに多少の学習歴があることを考えれば不可能ではないと見込んでいた。結果は2日目にハイキングで遠出をしてしまったこともあって目標を達成できず、これは大きな反省点。

それでも2名の学生が日吉特別講座に参加してくれることになったのはとてもよいことだった。未修分は補習でこなすことにした。

恒例の発表会の出し物はフランス17世紀の詩人ラ・フォンテーヌの『鳥と狐』。前日にハイキングしながら決めた演目で、たいして準備する時間もなかった。それでもたった数時間のこの共同作業が、学生たちにも、わたしたち教員にも、予想外の忘れがたい経験になった。教える者と教えられる者が手さぐりで何かを作り上げていくこと。そこには「学校」というもののプリミティブなありかたが凝縮されていたように思う。

付言しておきたいのは、セミナーに出発する数日前に事情があってフランスに急遽帰国したにもかかわらず、当日の朝、成田から駆けつけてくれた外国語学校講師ジャン＝ミシェル・バルダン君のことだ。彼の責任感と情熱的な指導がなければ、今回のセミナーは「特別な」ものにならなかった。そしてもちろん、終始、献身的なサポートを惜しまなかったセンター職員のみなさんにも心から感謝申し上げたい。こうして関係者の善意に支えられたのは幸運だった。

しかし今後もセミナーが継続されるのだとしたら、善意や幸運をいつまでも期待するわけにいかないだろう。自戒をこめてそう思う。



発音、寸劇、踊り…充実した4日間

中国語コース担当 山下 輝彦（文学部教授）

今回の中国語コースは教師（呉敏女史・山下）2名、学生9名で行われた。

印刷教材は例年通り事前に郵送したが、今回は試みとして録音・映像教材をネット上に載せ各自ダウンロードさせ予習させた。これらの教材で予習したことは講習で大いに生かされたと思う。

問題点としては、このセミナーが大学の全学生を参加対象としていることで前以って学生のレベルを把握出来ず、初級から上級



までの様々なレベルの教材を用意することとなってしまう、結果的に学生に負担をかけることになったことがあげられる。また、二つの班（発音やり直し

班と会話・寸劇班）に分けて授業を進める予定が、両方をやりたいという学生の意見で、一班に変更することになったり、教師の用意した中国語の歌が学生達の趣味に合わず不評だった等、これら全ては準備段階で希望を聞く等の対策が取られれば避けられた問題ばかりであり、こういった点で次回に課題を残したと思う。

その他、通常の授業ではなかなか出来ない漢詩の暗記や寸劇を、毎回同様、今回も行った。漢詩「楓橋夜泊」で発音矯正し、過去にテレビの中国語講座で放送された寸劇を演じて中国語の自然な会話のコツを身につけて貰うことにした。山荘の近くの女神湖の湖畔で、心地よい風に吹かれながら、学生達は自然を満喫しながらも一生懸命発音練習と暗記をしていた。寸劇は極力指示を与えず学生の自主性を尊重するという方針をとったが、自分達で演技をつけて見事に中国語で演じてくれた。それらは全てビデオで撮影し皆で見て反省材料とした。最後の晩のパーティーで呉敏先生の指導された新疆ウイグル族の踊りを踊ったが、学生達は寝ないで自主練習したらしく、初めての踊りにも拘らず見事に披露していたと思う。これは楽しい青春の一コマであったのではないかと考える。

短くも充実した4日間で得た事は今後の学生生活に活かされて行くものと希望する次第である。

- 1) 講師氏名、2) 担当科目名、3) 開講地区、4) 所属
 5) 担当科目で取り上げているテーマやスキルに関する著作や教歴、
 あるいは参加されたプロジェクト等があればお書き下さい。
 6) 担当科目に関してどのような言語教育観をお持ちですか？
 7) 5) 6) に基づいて、どのような授業を行っていますか？

5) 6) は片方だけの回答も可。

- 1) ロバート・ギブソン、2) アドバンスト英語（最上級）、3) 日吉、
 4) 法学部専任講師

6) My attitude to content courses is that they require a high level of language proficiency from participants, but even more a high level of interest and commitment. The content of my courses at the Language Centre will change as time goes on, in response to course members' comments and preferences. I hope that these will contribute to steady improvement in my courses.

7) Classes call for active participation by all members, as well as a willingness to work semi-independently on a personal project as well as set class assignments.

- 1) アン・バトラー、2) 英語TOEFL 対策、3) 日吉、4) 非常勤講師

5) I have spent the past four years in developing/adapting materials for use in CALL labs, and have taught the Tateshina TOEFL course for the past seven years. I have also taught TOEFL at another institution, as well as TOEIC regular classes and intensives.

6) I have no "blanket" philosophy of language teaching/learning, since I believe one must take both the learners (their level, motivation, reasons for studying, etc.) and the course into consideration and then develop a suitable approach. Experience has taught that an approach that works for one cohort will not necessarily work for another. Ideally, however, I believe classes should be learner-centered, particularly with more advanced groups, and students should be able to discover fundamental points on their own instead of having them presented by the instructor.

7) In this class, students generally work at their own pace on the specified weekly topic-listening, grammar, or reading. The exception is writing, in which one topic is assigned for timed writing. Students look up unknown vocabulary either in regular or on-line dictionaries, and record the words in a notebook, which is submitted twice per term. I circulate around the room and provide individual assistance and explanation for those who need it. Working individually certainly appears to encourage student questions, perhaps since there is none of the embarrassment of asking questions in front of the class. Students who complete a satisfactory amount (and this is self-determined) of the topic may then proceed to work on another section of their choosing. Students record completed activities on a sheet especially designed for this purpose, and this is handed in weekly. While it is not used for evaluation purposes, it does provide considerable insight into both their ability and the level of difficulty they can cope with. Very occasionally, as a check, the activity will be class-centered with everyone working on the same problem.

- 1) 松岡 和美、2) 英語Grammar in Action: Speaking and Writing、
 3) 日吉、4) 経済学部助教授

5) 人間言語の文法研究が専門です。しかし外国語教育研究センターのクラスで教えている「Grammar」には自然言語の文法よりも、社会的に「正しい」と決められた「約束事」の方が多く含まれています。

6) 単文や和訳を使った文法の訓練ではなく、文法を意識してパラグラフを書いたり、スピーチをしたりするクラスを一度やってみたくて思っていました。内容も「英語マニア」が集めるトリビア的なものではなく、英語圏で頻繁に使われている表現を中心に扱うように心がけました。

7) アメリカのESLクラスで定評のある教科書*Grammar in Use*の中級版を用いて、100%英語で項目の解説や質疑応答を行っています。授業で解説した文法表現を意識して作成するパラグラフライティングが3回、書いた内容についての口頭発表が2回、確認テストが3回あります。

- 1) ジェームズ・レイサイド、2) アドバンスト英語（最上級）、
 3) 三田、4) 法学部教授

5) 英語を教える経歴は20年に及びます。日本人だけでなく、他の国籍の学生を教える経験もあります。主には準上・上級レベルのコースを担当してきました。そのなかで、上級の学生もまだ完全に身につけていない技能すなわち、作文、公式の発表、公式演説などを重視してきました。私自身もドラマ、パブリック・スピーキングのワークショップに参加し、また、ワークショップを指導した経験もあるので、そういった経験を生かし、自分の授業の内容に反映させています。

7) 参加する受講生はすでに一般的な英語を自由に話せるので、もっと正式な状況で使う英語に焦点を絞っています。交渉 (negotiation) と会議などのロールプレイの他には演説の練習も繰り返します。講師からの評論だけではなく、受講生同士で評論し合うことで、英語で人に助言を言う練習になります。三田の授業なので、塾生は宿題や準備をする時間はあまりないと思いますが、毎週教室の中で行うロールプレイ、スピーチなどのための適切な準備をしてほしいと思います。アドバンスト (最上級) コースですから、かなり少人数クラスになると予想されるでしょう。よって受講生一人一人が単独で活躍するチャンスは、沢山与えられるわけです。

- 1) 日向 清人、2) 経済・金融英語 / 法律・法務英語、3) 三田、
 4) 非常勤講師

- 5) ビジネス英語スーパーハンドブック (アルク)
 ビジネス英語スーパー辞典 (アルク)

オンライン・ビジネス英語辞書 (http://home.alc.co.jp/db/owa/bdion_sch)

6) 受け身でわかる程度に留まらず、実際に口に出して言え、かつ、書けるレベルに達するには、経験上、まずは専門用語の意味を理解してから、こういったコンテキストで使われ、コロケーションがどうなっているかという点についての問題意識を持ちながら実際の用例に数多く触れていくことが大事だと思っています。

7) 経済記事、法律入門書の抜粋等、専門用語の実際の使い方がわかる資料を配付し、ことばの使い方を中心に解説を加えています。また、ことばは音が基本だと理解しておりますので、学習すべき専門用語の入っている資料が読み上げられている資料 (オーディオブック等) を用いたり、場合によっては、必要なものを声優に依頼して音読してもらったテープを使うよう心がけています。その上で、記憶への定着のために折々穴埋め問題で復習しています。

1) 三瓶 慎一、2) ドイツ語表現技法、3) 三田、4) 法学部助教

5) 『CDで学ぶドイツ語入門』、『音から入るドイツ語』、『ホントにあったウソみたいな話』(以上、白水社)

6) 「聴いて理解することはできるんですが、話すのは苦手です」というのをよく耳にします。しかし「聴く」ことはそんなに簡単でしょうか。魅力的な話題のある人なら、多少ブロークンで自分のペースで相手に語りかけても理解してもらえます。しかし「聴く」とときには完全に相手のペースに合わせねばならず、「読む」ときのような時間の余裕すらありません。一見「受動的」に見える「聴く」という営みも、実は全身の感覚を使い、あらゆる言語経験や持てる世界知を総動員しての、きわめて「能動的」な言語活動です。ゆえに成人の学習では漫然と聞いていても上達せず、それなりのストラテジーが必要です。さらに構造的に「聴く」練習をすると、文法がいかに重要な手がかりになるかも実感します。「語彙力」の強化と並んで、既知の語彙から未知の語彙を類推できる力が必要です。

7) 文体や話題の異なる様々なドイツ語を聴いてもらい、内容要約、逐次通訳、重要表現の口頭練習、シャドウイング、ディクテーションなどの練習を行っています。さらに、文法知識の確認とその応用発展のための練習、語彙力増強のための造語法の解説、現代ドイツ語圏の文化・社会・政治・経済などに関するレクチャーなど、多岐にわたります。

独

1) クリステル・ルカルヴェ、2) フランス語表現技法 / フランス語表現技法、3) 三田、4) 非常勤講師

5) J'enseigne le Français comme Langue Etrangère depuis 5 ans. Et je prépare mes étudiants aux DELF et DALF depuis 3 ans. J'ai déjà participé à la réforme de l'évaluation et des examens en Lituanie et je suis conceptrice des sujets au DELF / DALF pour le Japon depuis 2 ans.

6) Le plus important est que les étudiants aient conscience que le plus grand travail vienne d'eux-même. Le professeur est présent pour les guider, les aider mais il ne peut pas prendre leur place. Enfin, la communication orale et écrite est peut-être le plus important mais il ne faut jamais négliger le reste. Une langue est *un tout*.

7) Puisque la communication est très importante pour une langue, la participation active des étudiants est demandée. La préparation aux examens est assez formatrice avec des règles précises à respecter. Suivre ce cours permet aux étudiants de mieux comprendre la façon de penser des Français au travers de l'étude d'articles et autres documents. Un dialogue est engagé sur les sujets traités et toutes les opinions sont les bienvenues.

仏

1) 大楠 栄三、2) スペイン語表現技法 (中級) 3) 日吉、4) 非常勤講師

5) 「外国語としてのスペイン語教育法セミナー」(1996年11月、上智大学イスパニア研究センター主催)、「外国語としてのスペイン語講師養成コース」(Curso de formación para profesores de español como lengua extranjera) (2003年7月、スペイン・レオン大学主催)に参加した他、「『ことば』との出会い：ものまねのすすめ」(慶應義塾志木高等学校 課外の科目研究会編『ことばと文化』1号、1995年)等でスペイン語学習法を示唆した。

6) 第一に、日本語話者にとっての音声上の利点 スペイン語が同じ五母音で、五十音や濁音、半濁音を含め日本語の音(音節)に酷似している

を活用し、「聞く」と「話す」訓練を同時にすすめ、学習者にスペイン語でコミュニケーションできる喜びを実感させる。第二ステップとして、ビジュアル資料でスペイン語圏の文化を「見る」ことによって、学習者のモチベーション向上を図ると共に、それを教材に「読む」と「書く」訓練をする。

7) はじめに、これから見るビジュアル教材(ナレーションもしくは実際の会話付きのもの)に関して、テーマもしくは質問事項を前もって提示し、履修者に予備知識を与える。映像を見た後は、質問にスペイン語で答えてもらうと共に、疑問点等を出してもらい、フリー・トークの機会をつくる。最後に、取り上げた映像に関連するテキストを宿題とし、次の授業冒頭で、読解度を確認すると共に、疑問に応える。これが一つの授業パターン。

西

1) 熊野谷 葉子、2) ロシア語表現技法、3) 三田、4) 非常勤講師

5) 1999年度から3年間、慶應義塾外国語学校の upper level でニュースや映画を用い、聞き取り練習と、画面を見ながら台詞を暗唱させるアテレコを試みた。

6) 教室で学ぶ僅かな時間では、その後の自己学習に生かせる基礎訓練の方法を伝えたい。ロシア語の聞き取りと会話の壁の一つは煩雑な語形変化で、同じ単語でも数と格によって全く違った形で聞こえてくる。生きたロシア語を集中して聞き、とことん理解した上で暗唱するという練習を通じて、記憶が定着し使える語彙が増える実感を得て欲しいと思う。

7) 前期は、雰囲気の違いロシア映画3編を取り上げ、各5分程の断片を詳解した上で台詞を割り振ってアテレコを行った。後期はさらに身体動作をつけたドラマに挑戦する。折しもチェーホフ没後100年でモスクワからの来日公演もあるため、学生には語学的向上だけでなく生きたロシア演劇に触れることも動めている。

1) 呉 敏、2) 中国語ライティング (上級) 3) 日吉、4) 非常勤講師

5) 以前中国の学校で作文の授業を担当。来日後、フリージャーナリストとして、日本で発行される中国語の新聞・雑誌に記事執筆、翻訳などの形で活動。2003年講談社『中日辞典』に執筆参加。『やはり赤ちゃんが好き!』を中国語に翻訳・出版。(中国語訳書名『還是有個宝宝好』上海科技文献出版社 2004年1月。)

6) 外国語の学習において、「ターゲット外国語の規則と母国語の規則の差を把握することが重要」とであるという米国の言語学者 Z. S. Harris の外国語学習理論に賛同し、日中二言語の差を重視し、対照法と実践法により日本人学生が正しい中国語作文ができるように指導する。

7) CALL教室を使って主に和文中訳の授業を行なっているが、基本的には先ず対照法で日中翻訳の要領(日中基本文型の違い等)を説明し、次に単文、短い文章という順番に学生に翻訳させ、学生の中訳文をスクリーンに表示し、誤訳の部分を指摘して添削。多発する誤訳の文法的な間違いについて、豊富な練習問題を使って直す。さらに多く見られる語彙や文型の誤用例については、次回に課する翻訳文の中に類似したものを取り入れて、反復訓練法で、正しい表現法が定着するまで練習させる。

中

自律学習・ICTプロジェクト：外国語学校における実験授業

総合政策学部教授 古石 篤子

本プロジェクトの柱のひとつに、自律的な学びの姿勢を涵養する実験授業の構築がある。それをこの秋学期より慶應義塾外国語学校において、社会人を対象とする生涯教育の枠組みのなかで行わせていただくことになった。講座名は「メディアで学ぶフランス語」。NHKラジオ・テレビのフランス語講座とインターネットを活用しての講座である。生徒募集に多少の手違いがあり、当初の計画とは異なった形で始めることにはなったが、手ごたえもあるので概略だけでもご報告したい。

<日吉キャンパス 担当：古石 篤子>

授業は隔週で、ラジオ「フランス語講座入門編」(講師：古石)をベースにデザインされる。授業外では簡単な掲示板(BBS)をインターネット上に設置し、複数のWeb学習教材も紹介。受講者は月～木の毎日20分の講座を聞き、会話部分を暗記して出席することが条件。教室では主に発音指導とフランス語を使つてのやりとりで重点が置かれる。ラジオなどを利用した「孤独な」学習は途中挫折しやすいが、隔週でも仲間と会い、BBS上で質問の場が確保されることにより、良質の学びの継続が図れるのではないかと考える。

<慶應丸の内シティキャンパス 担当：國枝 孝弘>

授業はメールやWEBを日常的に使える環境にいる社会人を対象。毎週月曜夜に発音、会話を中心にした対面授業を行う。受講者はその後、同夜(再放送木曜朝)に放映されるテレビ「フランス語会話」(講師：國枝)を見て学習する。さらに複数のWEB学習教材で個別に学習をすすめる。また受講者は自分が学んだこと、番組の内容についてのコメントを週に1回WEB上に用意した「うえぶログ」に書き込みをする。これは自分の学習を振り返るとともに、他の学習者の勉強のしかたを共有することを目的としている。テレビはただ見てそれで終わりとなる傾向が強いが、対面授業とWEBにより、個人の継続的な学習を支援することがねらいである。

政策提言プロジェクト

外国語教育研究センター副所長・経済学部教授
境 一三

政策提言プロジェクトは、慶應義塾の外国語教育の「これから」を考え、日本の外国語教育を先導するプラン作りのために活動を始めましたが、現在はその第一段階として私たちの教育現場の現状を把握する作業に取りかかっています。

慶應義塾はいわゆる縦割りの学校です。それにはメリットもデメリットもありますが、最大の欠点は教員が自分の所属組織以外の学校や学部の実情を知らない、ということでしょう。同じ大学の教員であっても、所属学部以外の教育内容はほとんど知らない、ましてや高校や中学でどのようなカリキュラムがあるのか、などは知る機会もない、というのが大方の教員の実情ではないでしょうか。

しかしながら、私たちのプロジェクトは学部・学校横断的なプロジェクトですから、参加者は自分の組織以外の学部・学校の状況を把握する必要があります。現在まで、慶應義塾高校、文学部、経済学部、法学部の現状をそれぞれの所属教員から聞く機会を得ました。私自身も、そこで初めて高校の英語のクラス編成や一週の時間数などを知ることができましたし、また法学部のインテンシブ授業についても、その有り様をつぶさに聞くことができました。そして改めて、義塾の中でいかにさまざまな試みが行われ、努力が払われているかが分かりました。このような努力の結晶をいかに相互に結びつけ、それを基に義塾全体のグランド・デザインとしていくかがこれからの課題であると考えています。

慶應義塾の英語一貫教育を考える
プロジェクト

外国語教育研究センター一貫教育校主任・高等学校教諭
松原 一宣

4月30日発行の第1号にプロジェクトを紹介する内容を掲載して以来、幼稚舎から大学院の教職員の多くの方から、叱咤激励のお言葉をいただいている。その多くは、「ご苦労さん!」「大変だね。」と今までこの種のプロジェクトに従事した人からの同情である。このセンター発足という慶應義塾の新しい時代の中で、今までの提言をベースに、このプロジェクトを丁寧に、大胆に成し遂げるつもりである。基本概念は「外部試験を導入し、学習到達目標を設定し、学習成果の記録を取りながら効果的に英語学習をさせる」である。現在はtestingの知識を再認識するために、Backmanを始めとする研究書を読み返し、最近のtesting分野の動向を知るために神田外語大学院の小林先生の講演に出席したりして、「テストとは何か?」という原点に立ってスタートしている。さらに、様々なテスト業者から情報を得る機会も作っている。最終目標は独自の試験開発であるかもしれないが、この2、3年という短いスパンでは、今まで述べてきたコンセプトでいかに外部試験を各学校の実情に即したものにしようかである。

パネルディスカッション「デジタル・コンテンツとE-learning」

当センターの4つの研究プロジェクトのうちの一つ、自律学習・ICTプロジェクトが主催するパネルディスカッション「デジタル・コンテンツとE-learning」が7月26日、来往舎中会議室において開催された。現在、慶應義塾大学で外国語学習のために開発されている作品を提示し合い、コースデザインも含めてその基本をなしている考え方について議論をするというのがこの会の主旨である。同プロジェクトのリーダーでもある総合政策学部の古石篤子教授に司会をしていただき、3名のパネリストによる発表が行なわれた。(プログラムは以下の通り)。

國枝先生の「フォローアップ・フランス語」は動画・音声一体型のソフトで、文法項目ごとに説明が展開される構成であるため、授業を補完する教材として活用できるものである。Web教材という特色を活かした「知識のアーカイブ化」「音声と文字の同期」「ハイパーリンク化」が特徴で、また、「動画でこそ見せられるもの」にこだわって作成されたポップな色彩の可愛いアニメーションも学習者のモチベーション向上に一役買っていると思われる。

金田一・クナウプ両先生の自律学習ソフトは、「学習者にとって魅力的なテーマ・内容と美しいビジュアル映像」という点に力を入れて開発されたものである。映像はすべてドイツロケで撮影されている。良質の素材を出発点とするこのソフトの最大の学習効果は、利用者が画面の細部にまで細かく目を配ることで、言葉だけでなく文化への関心にもつながっていくことにある。また、素材映像を別の国で収録すれば、他の言語の学習へも応用が利く汎用性も魅力の一つとなっている。

水野先生の本多読プロジェクトは、コンセプトや素材を重視する前二者のものとは一味異なり、提供する教師と利用する学生の双方向的な実践が学習ソフトそのものの根幹を成している。学生は自分の興味や力量に応じ、各々で英語の本の本多読に挑戦し、その結果を電子掲示板に持ち寄って、紹介、推薦、論評、批判などのコミュニケーションを図る。こうしたプロセスを通じて学習者は、対象世界、他者、そして自分自身との対話的実践を行うことができる。

各パネリストの発表後、約30名の参加者を交えて活発な質疑応答と意見交換が行われた。

<プログラム>

國枝 孝弘 (総合政策学部助教授・フランス語)

Web教材「フォローアップ・フランス語」のコンセプトと制作

金田一 真澄 (理工学部教授・ロシア語) / ハンス・クナウプ (経済学部教授・ドイツ語)

自律学習と授業の教材作製・ドイツ語

水野 邦太郎 (環境情報学部非常勤講師・英語)

本と人・人と人の絆を結ぶ「互恵的な読書環境」の創出 - 電子掲示板を活用した本多読プログラム支援ツールの開発 -

一貫教育校の外国語教育(2)

慶應義塾普通部の英語教育

普通部教諭 跡部 智

普通部は日吉にある1学年240人の男子中学校です。入学者は幼稚舎から約70名、入試を経て約170名、卒業生は200名以上が日吉高へ、志木高とSFCへ約10名が進みます。

2001年度から1年生は20人×12学級、2、3年生は40人×6学級へ編成し直し、きめ細かい指導ができるようになりました。英語科では、新しい教育課程に連動して毎年コースデザインを見直してきましたので簡単にご紹介します。

授業時数は1、2年が週5時間、3年は6時間あります。一貫校の中では年間授業日数の多い本校ですが、英語の授業は年間正味120時間程度で、受験校と比べて多くはありません。つまり、最大の課題は、受験英語から解放された彼らに対して、授業外の学習の動機付けを何に求め、どう促進させるかということです。

2003年4月の新入生調査では海外経験者を中心に英検準1級～3級取得者が8名、既習と認められる者が20名程度いました。Slow Learnerと上級者の対策を重視し、土曜日の1時限目にSelf-Access Learning Centerを開き自主学習の習慣が身につけられるよう学習ストラテジーの指導を行い、初習者の「つまずき」を手当てする取り組みを始めました。しかし、習熟度別編成や英語を免除して他の言語を履修させるといった上級者の動機付け向上策は実施できていません。ホームルームを中心とした生徒指導は大切ですから、現在は多様な経歴の生徒が20人クラスの中で一緒に学習し、協同学習を進める雰囲気を作るようにしています。

2、3年生では40人クラスを英語母語者と日本人で分割しています。各学年とも検定教科書と洋書、言語構造の理解を深めるための演習問題集を使い、4技能のバランスをとるようにしています。さらに、希望制の選択授業(土曜3、4時限目)では英語を積極的に使用し、より深い学習を進めています。今年度は、英語リスニング、英語で世相を語る、English through motion picturesの3講座を開設しました。

また、希望者への英検実施に加えて、2002年12月からコンピュータを利用したCASEC(英語コミュニケーション能力判定テスト)を全員に実施しています。2年生の3学期から卒業するまで毎学期、計4回で自分の英語力の推移を客観的に知ることができます。今春の卒業生は、700点以上(準1級)4名、530点以上(2級)29名、400点以上(準2級)91名、250点以上(3級)91名、249点以下(4級)22名という結果でした。頭で英語が重要だと分かっているにもかかわらず、実際に学習へ向かうには感情の手助けが必須です。「下手の横好き」を増やすにはどうしたらいいか、これからも課題をひとつひとつ解決していきたいと考えています。

オープンキャンパス報告

8月18日、日吉キャンパスにてオープンキャンパスが行なわれた。昨年に引き続き、来校した受験生らは塾生ボランティアの誘導の下、キャンパス内の主要施設十数ヶ所をツアーで見学した。外国語教育研究センターでは、慶應義塾が提供する外国語教育の全体像を掴んでもらえるよう、カリキュラムと施設の両面から説明を行なった。

まず、カリキュラムについては、学部授業と外国語教育研究センター設置科目の違いについて説明した後、本年度より開講された外国語学校日吉特別講座についても言及した。施設については、ツアー見学者への説明会場となった327番CALL教室を中心に、マルチメディアやインターネットを使った最新の外国語授業の様子を紹介し、さらにL.L.教室、外国語自習室などについても映像を見せながら具体的に説明した。

また、327番教室にパソコン（自主学習用CD-ROMやWeb Exercise）を使った外国語学習体験コーナーを設けたり、326番教室および自習室で多言語吹替えの映画を上映するなど、実際に見て、触れて、楽しめる大学見学を提供できた。このオープンキャンパスが、未来の塾生にとって語学学習計画の一助となるだけでなく、外国語を学ぶ楽しさと喜びを知るきっかけとなってくれたらと願っている。

10月からの新設講座・科目紹介 「メディアで学ぶフランス語」と「Writing for the TOEFL test」

本年度より外国語学校の授業が「日吉特別講座」という形で日吉キャンパスでも受けられるようになったことは、既にご存知の方も多いと思います。さらにこの10月より、外国語教育研究センターの「自律学習・ICTプロジェクト」からの提案で、特別講座「メディアで学ぶフランス語」が開講されることになりました。この講座は、教室での授業とNHK「ラジオフランス語講座」、またはNHK「テレビフランス語会話」を利用して初歩からフランス語を学ぶ社会人対象の講座です。授業ではラジオ・テレビ・インターネットを利用してひとりでも学習を深めていけるようにガイドしていきます。

秋学期に外国語教育研究センターに設置された「Writing for the TOEFL test」は上記講座と並んで、「自律学習・ICTプロジェクト」から提案された実験授業です。講師は水野邦太郎先生。この授業は、2000年10月よりTOEFLがコンピュータ方式に変わり、ライティングが必須となったことを受け、英語圏に留学を志す学生たちがライティングのセクションで高得点を上げ、留学中に課せられるレポートにも対応できることを目標にして設計されています。

授業の前半では、TOEFLのライティングセクションで高い得点を得るために、エッセイがどのような要件を満たすことが必要かを分析し、論理的、かつ個性的な文章をまとめるための準備を行います。後半は、テスト方式でエッセイを書く実践を行い、それと同時に、水野先生のホームページ上に「学びの共同体」の一つとして構築されているInteractive Writing Communityに参加し、様々なテーマについてエッセイを投稿し、SFC、上智大学、京都大学など、国内外の学生が書いたエッセイを読み、互いにコメントしあうことによって、文章によるコミュニケーション能力を磨いていきます。

2004年度 第1回オーストラリア短期語学研修 実施決定

今年度から外国語教育研究センターの主催で「慶應義塾大学 The University of New South Wales 短期語学研修」を実施することが決定しました。

研修期間：2005年2月7日（月）～3月11日（金）までの5週間

研修場所：オーストラリア シドニー

The University of New South Wales (Institute of Languages)

募集対象：慶應義塾大学に在籍する塾生（大学院生、通信教育課程正科生を含む）

募集人数：30名(定員を超えた場合、コンピューター抽選を実施します)

研修費用：約50万円(語学学校研修費＋ホームステイ費＋渡航費用＋海外旅行傷害保険 含む)

シドニーの The University of New South Wales は1949年の創立以来、州内で最大規模を誇り、かつ最も高い評価を集める大学の一つとしてその地位を確立しています。過去50年間、国際的教育事業に大きく貢献してきた同大学には現在、約33,000人の学生が学んでおり、学生の国籍が非常に多様であることでも知られています。

1966年に創設された、同大学の言語研究所（Institute of Language）は海外留学生を対象とした教育や福祉面において豊富な経験を誇り、オーストラリア国内で最も豊かな歴史と伝統を持つ語学研修センターです。英語コースに関しては、短期から長期まで様々なレベルにおいて、優れた英語教育を提供しています。

今回の語学研修は、美しいビーチや公園に隣接した素晴らしい環境のキャンパスで学習することによって、教室においては様々な国籍の学生との異文化間コミュニケーションを行い、また研修期間中の生活においてはホームステイを通じてオーストラリアの人々と交流しながら英語力の向上を目指すプログラムです。短期間に質の高い充実した内容が盛り込まれていますので、オーストラリアでの生活を経験しながら、語学力の向上をはかることができます。将来長期の留学を考えている塾生や、英語力を向上させたいという意欲的な塾生にとって、有益な語学研修と言えるでしょう。多数の参加申し込みを期待しています。

追悼

去る6月15日、当センター副所長深井智純先生が病気のため逝去されました（享年36）。深井先生は、慶應義塾高等学校教諭として生徒の指導にあたるとともに、2003年10月の当センター発足当初から副所長としてセンターの重責を担われてきました。当センターが、幼稚舎から大学院までの慶應義塾全体の外国語教育を考える母体となる組織であるということからも、深井先生に副所長をお引き受けいただいたことの意味は大きく、先生はまさに一貫教育校と大学の外国語教育をつなぐ「要」の位置にありました。センターでのお仕事は、主にセンター開所記念シンポジウムの開催運営、「Newsletter」をはじめとする各種刊行物の編集、夏季外国語セミナー等多岐にわたりました。どんなに忙しい時でも、情熱と誠実さと人に対する真心を忘れないそのお仕事ぶりに、いつも我々は励まされてまいりました。あらためて感謝の気持ちを表するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

新副所長紹介



10月1日付で商学部専任講師・吉田友子先生が副所長に就任されました。ご専門は異文化間コミュニケーション、担当科目は英語です。吉田先生は当センターの前身である語学視聴覚教育研究室において中矢一義室長のもと、1999年10月～2002年3月まで2年半にわたり主事を務められました。当センター恒例のアカデミック・ライティング・コンテストは、旧語学視聴覚教育研究室時代から通算して今年で4年目を迎えますが、吉田先生はこのコンテストの発案者の一人でもあります。外国語による自己表現の手段として、プレゼンテーションやスピーチと並んでライティングの重要性に着目し、一人でも多くの学生に英語でペーパーを書く機会を与えたいという主旨で始められたこのコンテストにおいて、提出される小論文は年を追うごとに質・量ともに充実しつつあります。そうした意味で、吉田先生が副所長として再びこのコンテストに関われるにあたっては、まさにご自身がお撒きになった種の大きい成長とその豊かな実りを実感されることでしょうか。今後のより一層のご活躍を期待いたします。（2004年度アカデミック・ライティング・コンテストの報告は、次号の「Newsletter」でお届けする予定です。）

編集後記

記録的な猛暑が続いた今年の夏、仕事や勉強、あるいは避暑休暇で海外に行かれた方も多いと思います。ところが夏休みの大学は、オープンキャンパスや通信教育課程の夏期スクーリングなど夏ならではのイベントもあり、意外と静かにはならないものです。そして、当センターの夏の一大イベントと言えば夏季外国語セミナー。今年も多くの先生方のご協力を得て、無事に終えることができました。ありがとうございました。

今年の秋から冬にかけて、スペイン語とロシア語に関する2つの講演会を企画中です。お楽しみに！

外国語教育研究センター「Newsletter」編集担当 山口昌子

Newsletter

Oct.2004. Vol. 3

慶應義塾大学外国語教育研究センター
KEIO RESEARCH CENTER FOR
FOREIGN LANGUAGE EDUCATION

発行日 2004年10月30日

代表者 迫村純男
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-563-1111 (代表)
E-mail fcenter@info.keio.ac.jp
<http://www.fcenter.keio.ac.jp/>